
リリカルなのは.hackers

C E L L E

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは .hackers

【Nコード】

N2264Z

【作者名】

CELLE

【あらすじ】

.hack / G.U. とリリカルなのはのクロス。開始は無印なのは原作4話終了後まもなく。カップリングは未定。

P r o l o g u e : A p p w i z ・ M o r g a n n a (前書き)

以前投稿してたものの設定を改変させてます。

Prologue : Appwiz・Morganna

我、お前に問う。

一つは安全だが長い道。一つは険しいが短い道。

お前はどちらの道を行くのか、答えよ……

Prologue : Appwiz・Morganna

何処までも続く夕暮れの荒野。そこにあるのは乾いた風と 剣
戟の音。

「あ、ああ……」

3人組の いや、既に一人は事切れて倒れている冒険者のパー
ティーを取り囲む無頼の者たち。その頭領たる女斬刀士フレイドは手に持つ
剣を少し弄んだ後、残っている片方の男を無表情のまま切り捨てる。

「ひいッ……あ、あああ……」

仲間がまるで小枝を払うかのように倒された事に動揺する術師の
少女。そして頭領の女戦士の冷たい眼差しを見、その場から逃げよ
うと駆け出した。

だが、現実には甘くない。すでに彼女の逃げる方向には2人の男が
立ちふさがっていた。

下卑た笑いをする細身の双剣士ツインソード、そして身の丈ほどある大剣を持
つ無表情な太った撃剣士フランディッシュ。

「た、助けてください…」

先回りされたことに動揺し尻もちをつく少女は縋るよう彼らに命乞いをした。だがその背後からはゆっくりと…ゆっくりと口端を歪め、せせら笑いつつ手に持った剣を弄ぶ先ほどの女斬刀士が近づいていた。

そして、少女は断末魔を上げる事すら許されず、女斬刀士の喜悦の声と共に散った。

その光景を高台の上から静かに見ている影がいた。

その身に纏うは漆黒の重鎧。スマートながら刺々しく装飾を施されたその姿は触るモノすべてを切りつける鋭利さを持っていた。そしてその鎧を身に纏う白髪青年は踵をゆっくりと返し…これから始まるであろう『彼による』虐殺シヨールを思い浮かべ静かに嗤っていた。

女斬刀士はいつものように狩りをしていた。道行く冒険者を徒党を組んで襲い、その身ぐるみを剥ぐPKプレイヤーキラーであった。すでに冒険者ユーザーの名の知れたその女の名前はボルドー。所属するギルド『ケストレル』においてギルドマスター『がび』を心酔する歪んだ少女だった。

いつものように襲い、そして斬り伏せた女の頭を踏みつけつつ次の得物を思索する。

彼女にとってPKとは息をするような自然な行為であった。日ごろ『現実世界』で溜まったストレスや鬱憤を他人に気が済むまでぶ

つけ、踏みにじり、命乞いをする者を冷酷に処する悪役が彼女の口演技でもあり愉悦でもあり、また彼女が内心で恥じているものだった。

そして享樂にふける彼女らに背後からゆっくりとに歩みよる者がいた。

そしてその影は徒党の一員である男に近寄り…その背中を蹴飛ばした。

蹴飛ばされ前に居た仲間の一人に覆いかぶさるように倒れ込む男。その声に後ろを振り向いた彼らはその影を見て表情を一変する。

「死、死の恐怖……！！PKKのハセヲだあ！！！！」

細身の出っ歯の双剣士、ネギ丸がその影を指差し、目を見開きつつ彼の名を口にした。

死の恐怖　それは有名なPKKプレイヤーキラーであるハセヲの異名である。PKたちの恐怖と憎悪の的である彼は100人のPKを斬ったとか、無敗の黒い錬装士とか『The World』のPK全員から狙われているなど様々な憶測や噂が語られる存在。だがその実力は本物であり彼が次に狙う獲物とその勝敗で賭けが催されるほどだった。

「何イ！？」

ボルドーが目を剥く。目の前にいる『戦士』は正しく百戦錬磨の玄人。だが味方は10人以上、たかだか一人でこの人数相手に喧嘩を売るなど常識で考えれば自殺行為もいところである。

だが、彼女の侮りは一瞬のうちに消える事となった。

その言葉を聞きながらハセヲは薄く嗤いつつ手を背に回し双剣を召喚する。手に持つ双剣の名は芥骨^{あくたほね}、高速回転するその鋸の様な刃は唸りを上げ摩擦の熱で紅く煌めく。

「フツ！」

短い気合と共に駆け出したハセヲは一瞬のうちに眼前にいた一人を袈裟切りに、もう一人を返す刃で斬り伏せる。そしてその勢いのまま突進し二人組を組んでいると思われる男たちに迫る。

なんで、こんなことに…

畜生、なんなんだこいつは！？

ただ日常生活のストレスのはけ口として始めたPK、徒党を組^{リアル}み数の暴力で獲物を狩るといふ嗜虐的な恍惚感に酔いしれ、今日もたまたま居合わせた不運な冒険者を狩るだけ。その筈だった。

彼らが出来た抵抗は僅か1合、刃を合わせる事のみ。ハセヲの臂力に押し負け武器ごと大きく仰け反らされた後、身を屈め足払いのように繰り出された狩人の一閃のもとに二人まとめて倒される事となる。

その様子に焦ったのは当のボルドーである。ハセヲが自らに標的を定めたと見るや否やその片手剣を両手を用いて防御の構えを取る。突っ込む勢いのままに2合、3合。このままでは押し負けると見たボルドーは素早く後ろに飛び距離を取ろうとするがハセヲはそれを見逃さない。

苦悶に表情を歪めるボルドーに対しハセヲはいたって冷静であった。ハセヲの猛攻が僅かに止まり鏢迫り合いとなった瞬間、一人の男が上空からハセヲに迫る。

「ヒヤツハアオオオラアアツ!!」

その声は眼の前にいる異質なるモノに対する恐怖を振り払うためか。気合を込め一撃必殺を狙ったネギ丸の攻撃は……地を穿つだけに終わった。

身を翻し、後方に下がったハセヲは双剣を携え周囲を見渡す。

困む敵は4、5人、常人ならば未だ絶体絶命であるが……ここからが彼の、『マルチウエボン錬装士』死の恐怖ハセヲの独壇場である。

ハセヲの使うジョブ『錬装士』は世界において玄人、ないしハードゲーマー好みのジョブだ。キャラクターメイキング時に与えられたポイントを割り振り与えられたポイント内で他の専門職の武器が扱えるというものだ。

だが、世の中そこまで面白い話がある訳でもなく錬装士はその武器に関して専門職ほど極める事が出来ず、また極めるにしても専門職より膨大な手間暇がかかるのだ。

しかし、全てを平均的に極めたプレイヤーの強さは多を個を以て
圧倒するにふさわしい実力を持つようになる。

双剣をしまい込み、虚空から召喚するのは巨大な大鎌、首削くびそぎ。彼
が選んだ専門職の一つ、鎌闘士フリッカーの武器だ。

鎌闘士の特徴は何と言ってもその長大なリーチと前周囲をカバー
できる攻撃範囲の広さである。そして、ハセヲはその鎌闘士のスキ
ルを一線級のプレイヤー並みに鍛えていた。

勢いよく振りかぶり周囲を囲む敵を鎌から発せられた衝撃波で薙
ぎ払うスキル『環伐わきり』。初歩中の初歩であるが彼らとハセヲでは強
さの次元が違う。その初歩スキルですら周囲を取り囲むPKを一掃
するのには十分であった。

だがボルドー一味もただでは死なない。スキルの硬直を狙い、複
数のPKが空からの強襲を同時に仕掛けていく。だがそれすらもハ
セヲにとって誤差範囲内であった。

「ハアツ!!」

気合を入れハセヲもまた空へ飛ぶ。そして繰り出したのは対空ス
キル『天葬蓮華てんそうれんげ』。まさに各々が得物を振りかぶり、襲いかかろう
とする敵を先の『環伐』と同様円を描くように一閃、有象無象を軽
々と地に叩きつけた。

ハセヲはこれで10人近くをわずか数秒で葬ったことになる。誰

の目から見ても明らかに格が違っていた。だが、その光景を見ても諦めない、いや抗うしかない者たちがいた。

「うおらっしやオラア!!!」

ネギ丸はハセヲの着地硬直を狙い叫びながら駆け出していた。狙うは手に持つ鎌。武器を弾き飛ばせばまだチャンスはある…そう踏んでいた。

そしてその企みは成功する……最初の段階までは。

武器を弾き飛ばしこれで反撃を企てようとしたときネギ丸の眼前には刺々しい装飾が施された漆黒のグローブ、その掌が向けられていた。

「へへ……へ？」

アドバンテージを得た事に僅かに気が緩んでいたネギ丸はいきなり向けられた掌に呆けたような声を上げてしまった。それは非常に…そう、非常に捕食者の前でとる行動としては不適切な行動だった。

次の瞬間、掌からはハセヲが詠唱していた魔法『レイザス』が勢いよく放たれ、ネギ丸は遙か彼方へ吹き飛ばされる。

断末魔を上げ、二転三転と地面と熱烈なキスをしながら吹き飛ばされていくネギ丸。そして彼の敵を討たんとハセヲの後方から巨漢の撃剣士グリーンが迫る。

いける。

完全な死角からの一撃。さすがにレベル差があるとは言え『The World』において最高の物理攻撃力を持つ職である撃剣士の一撃は重い。徒党を組み数で押している以上わずかなダメージで

も蓄積されたそれはハセヲという名の大山を崩す切っ掛けになりかねないのだ。

だが…所詮、たかだか針の一穴である。

一瞥もすることなくハセヲはそれすらも紙一重でかわしてしまふ。

サイドへと回転しながら飛び、猫のようなしなやかさで着地するハセヲに、追撃を加えんとグリーンが大剣を大上段に構えて迫る。それを見たハセヲは楽しげに口の端を釣り上げるとサイドステップでグリンの振り下ろしを避け、迎撃態勢を取る。

次に召喚するのは大剣、おおむかで大百足。グリーンと同じく撃剣士の武器だ。だがグリーンと違うのはグリンの武器はごくごく普通の大剣であるのに対しハセヲの大剣は歪なチェーンソーであった。

空中から自重を利用し渾身の一撃を放つグリーン。だがその一撃をハセヲは唸りを上げる大百足の刃で受け止める。

これに驚いたのはほかでもないグリーンだ。錬装士のそれと比べて性能的アドバンテージのある専門職の渾身の一撃…それをハセヲは笑みを浮かべたまま見事に受け止めたのだから。

驚愕するグリーンを余所にハセヲは気合と共に彼を大剣ごと彼方へと吹き飛ばす。既に動けるのはボルドー一人だけとなっていた。

「ツチイイ…フツ!!」

舌打ちし、勢いよく駆け出すボルドー。内心では既に彼には勝て

そう、ボルドーが考えられるレベルの最善だったただけだ。

軽々と大剣で乾坤一擲の剣を弾かれ、首筋に巨大な鋸が添えらる。呆けた瞳に映るのは口元が見えず興味なさげに見下すハセヲ。彼女にとって、彼に会ったことが不幸であった。それは火を見るより明らかで…だが彼女に憐憫を示すものはこの場には居合わせていない。最も弱者を狩り続けてきた彼女に同情をするなど同類の下種以外あり得ないのだが。

猛然と回転するチェーンソーが彼女のわずかに残った戦意を細切れにした後、ハセヲは沈黙を保っていたその口を開く。

トライエッジを知っているか？

その後、猛然と唸る大鋸の音とこの世の終わりが来たかのような悲鳴の後、ボルドー一味は仲良くタウンへ強制リザレクトされていた。

というのが、ハセヲとボルドーの出会いだった。

S i d e : ハセヲ

「ハ、ハセヲ！！こ、こんなもので釣ろうたってそうはいかないんだからな！！あたしは借りは返さないと気が済まねえんだよ！！いいな！！絶対には借りは返すからな！！！」

どうしたもんかな、こりゃ。と心なしか顔を赤らめるボルドーを宥めつつフィールドを散策する。

今回、痛みの森にてフレンド総員でのレベル上げ及びレアアイテム搜索実施という荒行企画を立ち上げた櫂を恨みたい。しかもくじ引きによってできたパーティー（PT）はよりによってボルドーとなつめというPK組だ。（ちなみになつめは自分がPKであることを自覚していない。自覚してはいないが全PK及び限られた『異名付』として恐れられるカオティックPK中最強と恐れられているのは事実である。）

痛みの森ということ二人の装備はレベルキャップ上最強に入る
回式・竜頭、古刀・磁晶丸を装備。さらにボルドーは武器に八手サ
ソリの尾、暗殺熊の掌、重芒ヒトデの標本を装備しバックスタブ（
後方からの攻撃時確実にクリティカル）＋状態異常（凶呪・猛毒）
の効果を付与。なつめはネン獺の顎骨（攻撃時一定確率でダメージ
の25%分SP（スキルポイント、呪紋やスキルの使用時に消費）
を回復）を装備してスキル使い放題という構え。

今回の狙いは断頭台の赤苔と反存在の相擁の回収。断頭台の赤苔
はHP強制半減効果。ダイニング、反存在の相擁は通常攻撃ヒット
時にダメージ値の25%を確実に自分のSPとして吸収する効果。
信念の掌握を持つアイテムだ。ちなみに前者がボルドーの要望で後
者はなつめの要望である。

ボルドーは珍しくグリンのお願いでとってくる、ということから
自分で使うつもりはないらしく折角だから同様の効果を持つ上位種
…反存在の汚染を個人的にプレゼントしたのだが…

「い、いいか！あたしがもらったってネギ丸とかに絶対言うなよ！
！いいな！絶対言うなよ！！！」

……どうしてこうなった。

こいつは昔からどうもこうツンツンしている割に俺に拘る。嫌っ
ているのか？と思ったたらそうでもなく「んじゃPT解散するぞー」
と言い出すと子犬が部屋を離れる主人を見上げるような目でこつち
を見てくるからそうとも言えない。でも好かれているかと思うとツ
ンツンしているし…女心はわからねえな。

さらにこんな色モノP.Tを更にカオスにしているのが最強のPK、カオティックPK『エッジマニア』なつめだ。ハセヲの仲間であり『The World』のグラフィックデザイナー、そして伝説のドットハッカーズの一人である『ひろし』の知り合いらしく性根はすこぶる善人ではある…のだが、アイテムのこととなると多重人格のように豹変し『ころしてもうばいとる』を地で行くというなんと扱いきれない女性だ。しかもその時の記憶がきれいさっぱり無くなっていて、増えているアイテムを「きつと頑張っているなつめへの神様の思し召しですね！」とか言っただけで喜んでいたりは何とも…

そもそも俺には女難の相でも出ているのだろうか？関わってきた女性といえば以前思い人であったとはいえ振ってしまった手前お付き合いにちよつと気が引ける志乃、天然キャラのタビー、電波系のアトリ、露出狂のパイに実は多重人格で男の娘な朔、恋愛しようにも重い背景のある楓、俗に言うツンデレらしい揺光、アスタに関しては論外のネカマだしな…柊？おいこの話でなんであいつの名前が出る？

とは言えアトリと付き合い始めた以上あまり過剰に他の女性（？）陣に関わりすぎるのも問題があるのかもしれないが…まあ大丈夫だろう。

ともかく今は…

「あー、ボルドーさんいいアイテム持ってますね。欲しいなー、欲しいなー、ほしいなー、ホシイナー……」

「！？ハ、ハセヲ！！手を貸してくれ！！！！」

ああ、攻略用に英知の蜀台（消費アイテム効果2倍・アイテムブースト）を装備しておいて正解だったな……破魔矢の召喚符（直線上の敵に光属性ダメージ）連射、鎮圧と……ふう、疲れた。上がったら望のそこ行って癒してもらおう……

「で、お前ら何してんの？」

「あー、ハセヲ……ちよい回復きれてさ、悪いんだけど『快癒の雨（PT全体HP全回復）』20個くらい分けてくれないか？」

「ごめんよハセヲ、こつちも『匠の気魂（味方1人のSPを100回復）』を25個ほどわけてくれないかな」

「ハセヲ……おいらも『快速のチャーム（味方全員の移動速度を25%上昇させる）』10個ほど分けてほしいんだぞお」

カナード組、何やってるんだ……だからあれほどアトリと組んで回復役置いておけと……ああアトリは櫂と楓んとか……って櫂いるなら回復役いらなと思うんだけどな。あいつアイテムフルストックでコンプしているし。

「んで、何時からいた？」

「いや、お前らがなつめちゃんと喧嘩しているところからだけど…
なんかあったのか？」

「…いや、いい。ああ攻撃アイテム系足りているか？…たつく足り
てねえなら早く言え、ほらよ」

カナード組に手持ちのアイテムをいくつか渡す。クーン、一応元
ギルマス（ギルドマスター）だろ…女の尻ばかり追ってないでしっ
かりしてくれよ。

「ハセヲ！…何ぼさつとしてんだ！早く先行くぞ！！！」

そう思えばボルドーの声。ああ、こいつはこいつで不機嫌だしな
んで俺ばっかり…

ハセヲの苦難は続く。

Side：アトリ

「「「「「おつかれさまー！」「」「」「」

ああ、やつと終わった。楓さんと櫂さん…現在の『月の樹』最高
戦力のPTだったから対してきつくもなかったけどレアアイテムの
回収はできたしこれでよし、と。

『痛みの森』は風景変わらないし殺伐としているしラッキーア二
マルもないし正直めんどくさいところだと思う。以前の私なら絶
対に行かない場所の一つだね、間違いない…ああ、久しぶりにハセ
ヲさんと二人つきりで サーバーに飛んでゆっくりしたいなあ。

そういえば楓さんに色々聞いてみたけど…ああ、大人の恋愛って難しいなあ。「まだお二人とも若いのですから節度をもって付き合っ
て下さいね」って…まあそれはそれで聞の話とかも聞いたりしたけど実行に移す日はそう遠くない…はず！

ハセヲさんと出会う切っ掛けになった『The World R：2（ザ・ワールドリビジョンツアー）』も殆どゲームクリアの領域に達してしまっただんですよね。それはそれで寂しい気もするなあ…続編も出るって聞いたけどハセヲさんに聞いたら「アトリがやるならやるかな」って…あーもうハセヲさん無意識に女たらしだからなあもう！そう言われたら止めるわけにいかないじゃないですか！

私たちに『碑文』がある以上、最初から辞めるといふ選択肢は存在しないんですけど。一応CC2社から給料支払われるようになってしまったわけだし…といっても八咫さんが支払っているとか聞いたけどどうなんでしょうか？本人に聞いても「リアルな時間を割いてでもインしてもらったことがある上、あちらの不祥事の問題もあるので貰ってもらわないと困るのだろう」ってはぐらかすばかりだし。一応貰えるものはもらっておいてまた東京行の資金にしておこう。

パイさんからお兄さんの法要にも顔出してほしいって言われてたし…

『The World』を始めてから本当に交友関係が広がったと思う。ハセヲさんが引きこもりタイプのゲーマーではないからその影響かもしれないけど…

オフ会に行つたときは大変だった。望君が一体どうやって一人旅の了承をとつたのが未だにわからない。本人は朔の言うとおりにやつただけだよ？って言つてたけどその朔さんのとつた策がすごく気になる…あ、楓さんや松さんと色々話したのは面白かつたなあ。槐さんは実家の都合で無理、ということを手紙だけだったけどむこうで元気にやっているみたい。

あとボルドーさんは羨ましいと思う。ハーフって反則じゃないの？ポリユーム的にもスタイル的にも。確かに嫉妬するなあ…本人はそれでストレス溜まつてやつてらんないとか言つてたけど…

揺光さんは揺光さんでハセヲさんに熱烈アタックしているし。むう、同年代のライバル…正確よし器量良しときましたか。本人も「まだ諦めたわけじゃないから！絶対に負けないからね！！」って宣言布告されたし…

…揺光さん、露骨に当てていくのは反則じゃないんですか？恋する乙女は無敵ってそういう意味なんですか？

白馬の王子様って意味なら、私も同じなんですよ？揺光さん…

そうやって物思いにふけってるうちにどうやら残っているのは私だけになっていた。みんな私を置いて解散していたらしい。一言くらい言えばいいのに…そう頬を膨らませながら一度ログアウトしようとした時、不意に音が聞こえた。

「…あれ？」

それは、私が良く知る音。私の碑文はとりわけ耳がいい。それにこの音は…忘れられるはずもない。

「…一応、八咫さんに連絡だけはしといたほうがいいかな」

何故、今…そんな思いを抱きつつ、私はメールを起動した。

P r o l o g u e · A p p w i z · M o r g a n n a (後書き)

ルビの練習をかねて。うまくできていますか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2264z/>

リリカルなのは.hackers

2011年12月8日02時00分発行